

— 連載 —

美術館のある風景 (第2回)



三菱一号館美術館の船出〈その一〉

三菱一号館美術館 館長 高橋 明也

前回のえら隆二・元美術館室長からバトン・タッチされた高橋です。今後は、二人で少しずつトピックを分け合いながら書いていくこととなりますので、しばしお付き合いください。

話を三菱一号館美術館に戻しますと、私が26年と半年余り勤めた上野の国立西洋美術館を辞して丸の内にやってきたのが、2006年の秋のことでした。三菱地所の「美術館開設準備室」が始動し、やがて3年半後の2010年の4月には、「マネとモダン・パリ」展を開館記念展として美術館がオープンしました。覚えていらっしゃる方もいるかもしれませんが、このオープニング展はお陰さまで大変充実したものとなり、30万人を越す来場者がありました。新米美術館としては上々の船出となったと言えるでしょう。

それまで来る日も来る日も、三菱地所・地所設計の担当スタッフと様々な議論と細部の検討を重ねながら、ようやくこの開館にこぎつけた訳ですが、この美術館計画には、それまでの日本の美術館ではあまり例のない、いくつかの大きな特徴がありました。そのひとつはまず、1894年に設計された建物を一旦しっかりと復元したうえで、空調・照明・セキュリティーなど、国際的なレベルの機能を備えた美術館に変身させていくという、二兎を追わなければならない難しい命題を抱えていたことです。

そしてさらに、本来、美術館という存在の根幹

にあるべき「収集品 (コレクション)」が、ほとんどゼロの状態から出発したこともあげられます。本来、日本、欧米を問わず、美術館には、まず収集作品があることが大前提です。コレクションを欠く美術館はただの展示場に過ぎません。公共的にそうしたコレクションを展示する施設が本来の美術館なのですが、その条件を見事に欠いていたのが発足当初の三菱一号館美術館プロジェクトでした。

他方、逆にこの建設計画には素晴らしいアドヴァンテージがありました。それは文句のつけようのない、丸の内という東京の中心部の立地です。それに加えて、オリジナルの建物は解体されたとはいえ、明治期の重厚な雰囲気をも十分に醸し出す、細部に渡るまで入念に復元された建築空間の存在です。これほど魅力的な展示空間は、世界的にみても稀です。都市の中心部にあって、都市生活と密接に関わる美術館、建築空間と共鳴する美術館という、これまでの我が国の美術館コンセプトには絶対的に乏しかったものを、三菱一号館美術館は初めから内包していたのです。

発足当初は僅か数人でスタートした美術館室は、開館時には10数名を数えるようになりましたし、現在開催中の「三菱一号館美術館名品選2013—近代への眼差し 印象派と世紀末美術」を御覧いただければ分かるように、コレクションも急速に充実していったのです。(次号に続く)